

縫いずれ

九州女大家政 ○藤弘洋子 近畿女大短大家政 高野延子

目的 布を縫い合わせる時、縫いずれは寸法のくるいを生じ易い。最近被服地にニット素材が多く、縫いずれ状態になり易い。そこで縫製法の違いによる縫いずれ寸法について比較検討を行なった。

方法 試料としてばうールジャージを基布とし、糸は伸縮性のあるレオテ66、伸縮性のないバズ糸の2種を用い、縫製法として襷の有無、ミシンのかけ方の相違(基本的な布の持ち方、基本的なものからはずれた布の持ち方)による実験を行なった。

結果 (1)基本的な正しい布の持ち方で縫製すれば、糸の伸びの有無、襷の有無に関係なく縫いずれは小さい。これら相互間には $P < 5\%$ で有意の差はみとめられない。

(2)基本的なものからはずれた布の持ち方で縫製すれば、襷をした場合のみ(1)との間に $P < 5\%$ で有意の差はみとめられない。しかし襷をしなければ $P < 1\%$ で有意の差がみとめられた。

(3)襷をかけ基本的な正しい布の持ち方で縫製した場合は、襷なしで基本的なものからはずれた布の持ち方で縫製した場合と比較して、縫いずれに $P < 1\%$ で有意の差がみとめられた。

(4)いずれの場合も糸の伸縮性の有無についてはこの実験結果からは影響がないと考えられる。

(5)縫いずれを生じないためには、基本的な布の持ち方が大切で、基本的な布の持ち方の出来難い場合は、襷を正しくかけることが必要と思われる。